

珠洲の土：瓦産業と珠洲焼

著者	河合 望
雑誌名	金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書
巻	25
ページ	59-69
発行年	2010-03-28
URL	http://hdl.handle.net/2297/23782

6. 珠洲の土 瓦産業と珠洲焼

河 合 望

1. はじめに
2. 瓦産業の概要
3. 瓦産業の衰退と珠洲焼
4. 珠洲焼の復興
5. 珠洲焼のこれから
6. おわりに

1. はじめに

私が最初にこの報告書のテーマにしようとしたのは、夏の本調査を通して出会った珠洲焼についてであった。珠洲焼をされている方々からのお話や、滞在していた民宿の近くに市立珠洲焼資料館や市立陶芸センターがあったこと、そして、自分の手で何か物を作ることが好きだったので、珠洲焼に興味を持ち、珠洲焼についてもっと知りたいと思い、珠洲焼をテーマにしたのである。

しかし、本調査を終え、珠洲焼についての資料を集めるうちに、珠洲焼と珠洲市の瓦産業には何かつながりがあるのではないかと考えるようになった。それは、珠洲焼と珠洲の瓦が同じ土を原料としていることや、お話を伺った珠洲焼をされている方々がかつて瓦工場を営んでおられたことから、漠然とではあるが何かしらのつながりがあるはずだと思い、報告書のテーマに瓦産業も加えることにしたのである。幸い私は雲津の方々にお話を伺う機会が多く、雲津は今回の調査地である石川県珠洲市三崎町の中でも特に集中して瓦工場が建っていた場所なので、瓦産業についても多くのことを聞くことができた。

この章では、まず珠洲市の地場産業の1つであった瓦産業の概要、その瓦産業の衰退の要因と瓦産業の衰退から珠洲焼の復興の流れを珠洲焼の陶工の方のお話を交えながら述べていく。そして最後に、珠洲市で行われている珠洲焼復興の試みや、珠洲焼に携わる方々の珠洲焼に対する様々な思いとともに、珠洲焼のこれからについて述べたい。

2. 瓦産業の概要

2.1 瓦産業の歴史

珠洲地方の代表的な地場産業のひとつであった瓦産業は、創業が明治時代初期と伝えられている。『珠洲市史 第6巻』によれば、1835（天保6）年、屋根全面に幾重にも貼られていた木羽板が不足し高騰したため、南黒丸の商家が馬渡の土を使用した瓦生産を藩に出願した。ところが、木羽板が不足しているのと同様、塩釜で塩を焼くのに用いる薪も不足していたため、その製造に薪を必要とする瓦生産は許可されなかった。しかし1871（明治4）年になると、小泊新の桜井清左衛門が蛸島村に始まり一時中絶していた瓦の製造を再興した。

また、1885（明治18）年には小木の谷内徳松が登り窯による「二度焼瓦」を考案し、瓦産業の発展を決定づけた。その後、明治時代後期の戦争景気や、火災対策から県令で家屋建築に設置が条件付けられたことなどで瓦の需要が増大し、業者数・生産量ともに増えていった。例えば、1900（明治33）年には245,000枚だった瓦の生産量が1911（明治44）年には100万枚を超えており、わずか10年間で生産量が4倍以上も増えていることを示している。

昭和に入ると戦争のために瓦生産は一時低下したが、戦後の復興期には空襲で瓦を失った家からの需要により生産は急上昇し、日本経済の高度成長期に訪れた住宅建築ブームでは、500万枚から600万枚の生産をあげている。

しかしながら、一時的な好景気の波が去り昭和40年代に入ると、個人経営の瓦工場が互いに生産競争しあうようになり、それだけではなく他県の瓦産業、特に愛知県の三州瓦との競合、消費地まで輸送費がかかりすぎるといった問題に直面し、珠洲の瓦産業は困難な状況に陥ってしまう。これに対して業界では、1973（昭和48）年に石川県瓦工業構造改善事業にのって、2つの協同組合を設置するなど、機械化や協業化による業態の近代化・大規模化と技術革新の途を選んだが、瓦工場は減少していく一方であった（珠洲市史編さん専門委員会 2004:208-209）。

表1 珠洲市製造業における事業所数の変動

	1966（昭和41）年			1975（昭和50）年		
	窯業・土石	繊維	総数	窯業・土石	繊維	総数
三崎町	36	—	44	9	22	36
飯田町	2	1	17	2	3	17
上戸町	3	2	10	4	6	20
宝立町	1	3	13	1	7	17
蛸島町	4	—	13	2	11	18
正院町	9	1	19	5	6	19

（『珠洲市史 第6巻』より）

表1に1966（昭和41）年と1975（昭和50）年の製造業における事業所数をあげた。事業所の総数には、窯業・土石や繊維だけではなく食料品やたばこ、木材、家具といったその他の製造業の事業所も含まれている。また、「窯業・土石」には瓦産業だけでなく、瓦産業と並び珠洲市の代表的産業である珪藻土産業も当てはまる。この表で見る限り、窯業・土石の事業所数は、珠洲市の中でも三崎町に最も多く存在していたことがわかる。しかし、1966（昭和41）年に36箇所あった三崎町の窯業・土石の事業所数も、2つの協同組合が設置された後の1975（昭和50）年には9箇所に減少している。協同組合を設置することでいくつかの工場が統合されたのも事業所数が減少した要因であるが、好景気の波が去り困難な生産状況になったため瓦産業自体を止めてしまった事業所もあるだろう。

三崎町の窯業・土石の事業所数が減少すると同時に、繊維工業の事業所数が増加しているのにも注目したい。繊維工業の事業所数は、1975（昭和50）年になるとどの町においても増加しているようだが、その中でも三崎町での増加が著しい。これは、昭和40年代から昭和50年代にかけて三崎町が窯業の中心地から繊維工業の中心地になったことを表している。お話を伺った雲津のNさん（80歳代、男性）は、1952（昭和27）年に瓦工場を始められたが、瓦産業が衰退してしまった後は人に雇われて紡績をされていたそうだ。

明治時代に始まった珠洲地方の瓦産業は、明治時代後期の戦争景気や戦後の復興期、高度成長期に訪れた住宅建築ブームにおける瓦の需要の増加によって地場産業として発展していったが、昭和40年代以降の瓦工場同士の生産競争、他県の瓦産業との競合、生産コストの上昇といった困難な状況の中、衰退してしまったのである。

2.2 珠洲瓦

珠洲地方で作られていた瓦、通称「珠洲瓦」（能登瓦ともいう）は、素焼で約900度、本焼は1,200度という高熱で焼かれることや、釉薬に特殊なガラス質を利用していることなどから、耐寒耐久性に優れていた。そのため、生産された瓦の多くは、冬にかなりの寒さを迎える富山や新潟、山形などの雪国に運ばれ、日本海沿岸の降雪地域を商圏としていた。

この地方に瓦産業が発達した大きな要因は、良質な瓦の原料となる土が付近に存在したことである。耐寒耐久性に優れる珠洲瓦の原料となる土は、粘りがあり山砂が混じっていて、焼いた時に割れにくいという性質を持ち、今回調査を行った小泊校下にも、この土が豊富にあったそうだ。だからこそ、瓦工場が珠洲市の中でも小泊校下に最も多く存在していたのだろう。

2.3 瓦工場の場所

珠洲瓦の工場は、雲津、小泊、伏見、高波の4集落の中でも、雲津に集中して建っていた。瓦

工業の最盛期（昭和30年代）には雲津に30軒（このうち2軒は共同窯）の瓦工場があったが、昭和40年代にはほとんど無くなり、最後まで続いたのは2軒だけだった。また、自分で瓦工場をやっているのだから、他人の瓦工場に働きに行くのだから、何らかの形で瓦産業に関わっていたのは、雲津の全世帯のうち約40世帯であったという。もちろん雲津だけでなく、伏見や高波にも数は少ないが瓦工場はあった。

瓦工場を営んでいた人々の中には、現在も葺き師として瓦工事業に関わっている方がいる。高波のTさん（80歳代、男性）の話によれば、雲津に瓦工場が建てられたのは戦後のことで、戦前には高波に瓦工場があったらしい。また、同じく高波のNさん（70歳代、女性）は、「高波には、瓦工場が3、4軒あった。高波は道がなく運送できなかったため、雲津に工場を建てることもあった」とおっしゃっていた。

瓦工場は最初、原料となる土を採っていた山の付近に建てられていた。しかし、これでは瓦を船で輸送するのに不便であったため、瓦工場は山から浜に徐々に移動していった。また雲津のKさん（60歳代、男性）は「瓦工場は広い土地を必要としたので、海岸沿いの広い場所に作られたのではないか」とおっしゃっていた。同じく雲津のKさん（70歳代、男性）は「瓦の製造にはニガリが必要だった」とおっしゃっていたので、ニガリを入手しやすいよう、工場が海岸沿いに移動したとも考えられる。

3. 瓦産業の衰退と珠洲焼

ここからは、瓦産業が衰退してしまった原因を3つ挙げていくことにする。

まず1つ目は、その生産コストの上昇である。販売価格の上昇を上回る生産コストの上昇は、瓦工場を営んでいた人々を苦しめた。生産工程の機械化が進められ、瓦を焼く窯は登り窯からトンネル窯に移行した。トンネル窯は、工場によっても異なってくるであろうがだいたい70メートルほどの長さであり、瓦を百枚以上積んだトロッコが数珠つなぎでトンネル窯をくぐり抜ける。この間に、瓦はきれいに焼き上がる。1日の生産量は、登り窯のときと比べてかなり増加し、協同組合による瓦工場では、1日に4,600枚もの瓦を生産していたという。トンネルの入り口が予熱帯、中央部は重油バーナーの焼成帯、出口が冷却帯という仕組みで、各地の瓦工場は焼成部門を中心に流れ作業に変わってしまった（北國新聞社 1978:105-108）。

かつて瓦工場を営んでいた雲津のKさん（60歳代、男性）は「トンネル窯は24時間稼働させていたので焼き上がる瓦の量が登り窯に比べて多くなったが、その分1日に必要とする土の量が増えたため、土の準備が追いつかなくなってしまった」とおっしゃっていた。珠洲瓦に使用していた土は山から採ってきていたため、石や木の枝が混ざった状態なので、焼成する前にそれらを

取り除く作業が必要である。また、余分なものを取り除いた後は、山砂などのいろいろな土を混ぜて約 1,200 度の熱に耐えうる土を作らなければならなかった。これらの作業は、瓦を手作業で作ってきた人々だからこそ持つことができる職人技術を必要とする。機械化が進められ作業の利便性が向上したかと思いきや、機械には頼ることができない職人だからこそできる作業における労働量が増えたようである。

瓦産業の衰退原因 2 つ目は、他県の瓦産業との競合、特に愛知県の三州瓦との競合である。珠洲瓦が雪に強いのに対し、三州瓦は雪に弱いが、珠洲瓦と比べて軽く、またその色の種類も豊富にあった。薄くても実用に耐える瓦にするための工夫として、三州瓦には釉薬を使った色瓦がある。三州で釉薬を用いて色瓦を焼く試みがなされたのは明治時代末のことで、大正末期には緑色、マンガン色のほかに青緑色の色瓦も焼かれるようになった。この色瓦の需要が増え始めたのは戦後で、洋瓦だけでなく和瓦にも色瓦を求める人が増え、1964（昭和 39）年以降、三州では陶器の色瓦の生産が最も多くなったようである（瓦 Web より）。鉄分を多く含む珠洲の土を使用している珠洲瓦は、その性質上、色は黒一色であり、耐寒耐久性には優れていたが、雪が多く降る地域以外、特に、瓦に質だけではなく見た目も求める人々からの需要は、三州瓦に比べて少なかったのかもしれない。

3 つ目は、瓦の運送法の変化である。陸送がまだ発達していない頃は、珠洲瓦は船で運ばれていた。1950（昭和 25）年頃までは、瓦を買いに来た人が船で直接、瓦工場のすぐ近くまでやって来て、その場で瓦を船に積んでいたそうである。瓦工場が海岸沿いに建てられていたからこそできた運送法であろう。雲津の T さん（60 歳代、女性）には「瓦を買いに来る人はお金をたくさん入れたリュックをかついで、船に乗ってやってきた。そのリュックのお金で瓦を買い、その瓦を船に積み込んですぐ帰っていった」というおもしろいエピソードも聞くことができた。1972（昭和 47）年頃になると、貨物列車で瓦を運ぶようになった。列車だと 1 度に莫大な量しか運べなかったのも、大手のところしか買ってくれなくなり、少量だけ買いたいという個人などには売ることができなかつたようである。その後、陸送が発達し運送方が貨物列車からトラックになると、トラックは車のサイズで運ぶ量を変えることができたので、個人にも買ってもらうことができるようになった。しかし、能登半島の先端に位置する珠洲地方にとって、陸上から瓦を運ぶよりも、瓦工場が連なる海岸沿いからの運送の方が効率的で、消費地までの運送費も安かつたという。

以上挙げた 3 つの主な要因によって、珠洲地方の瓦産業は衰退してしまったのである。瓦産業が衰退した後、工場を営んでいた人々は葺き師になったり、繊維工業に関わるようになったり様々であったが、私がこの調査で出会った人々の中には珠洲焼を始めたという方がおられた。その珠洲焼について詳しくお話を聞かせてくださった御二人の、瓦産業をやめてから珠洲焼を始めるまでのエピソードを述べていきたい。

◎雲津のTさん（60歳代、女性）の場合

Tさんが珠洲焼を始められたきっかけは、市立陶芸センターでの陶芸体験だった。瓦工場を営んでいたTさんは、瓦工場をやめた後も葺き師として屋根に上がり仕事をしていたが、息子さん（30歳代）が同じく葺き師として仕事を始められると、息子さんの方から「もう仕事をしなくてもいいよ」と言われたという。家の事はTさんのお母様の担当であったため、家にいてもすることが無くなってしまったTさんは本ばかり読むようになった。ずっと家の中で過ごしているTさんを見かねて、ちょうどその頃、仕事の長期休暇で帰ってきていた娘さんがTさんを陶芸センターの陶芸体験に誘い、一緒に体験をしに行った。それから何度も陶芸センターに通い、合計して4、5回は体験したという。最初から「珠洲焼をやりたい!」という考えはなく、瓦工場で幼いときから土に触れていたTさんにとって、瓦と同じ珠洲の土を使って作品をつくっていく珠洲焼は親しみを持てるものであった。何度も土に触れ、珠洲焼を体験するうち、珠洲焼で作りたいものができてきたらしい。初めての陶芸体験から2ヶ月経った頃、陶芸センターに何度も通うTさんに陶芸センターの指導員の方がセンターの塾生になることを勧め、Tさんは2001年8月に中途として塾生になったのである。

◎伏見のKさん（70歳代、男性）の場合

Kさんの家では、Kさんのお父様の代から瓦の生産を始めた。大学卒業後、Kさんはお父様と一緒に瓦工場を営んでいたが、1970（昭和45）年頃に瓦産業が機械化などで衰退してしまうと、Kさんの家も瓦工場をやめてしまった。その頃、珠洲市では珠洲焼を事業家しようという動きがあった。珠洲瓦に使っていた土と珠洲焼に使う土が同じであることを知ったKさんは、「同じ土を使うなら珠洲焼を始めよう」ということで、珠洲焼を始められた。また、昔から物を作るのが好きだったというのも珠洲焼を始めた理由の1つだという。その後、Kさんは珠洲市の珠洲焼復興事業の一環で作られた研修センター（現、珠洲焼実習センター）で3年ほど珠洲焼の研修をされた。研修開始当初は研修生がKさんのほかに2、3人しかおらず、その研修生の見様見真似で修業されたらしい。1988（昭和63）年、ご自宅で開窯された。

珠洲焼に携わる御二人のエピソードを述べたが、どちらにも共通しているのが、御二人とも、珠洲焼が珠洲瓦と同じ珠洲の土を使う焼き物だからこそ深く関わるようになっていったという点である。Tさんは、幼いときから慣れ親しんでいた珠洲の土を通して珠洲焼に親しくなっていく、Kさんは珠洲瓦と珠洲焼の土が一緒だということを知って珠洲焼を始めようと思われた。他にも、Tさんが初めのうちは珠洲焼を本格的に始めようとしていなかったのと同様に、Kさんも物作りが好きという思いで始められたのである。「最初は遊び半分で作品を作っていたが、だんだん注文

が入るようになり、いつのまにかこっち（珠洲焼）が本職になってしまった」と笑顔でKさんは語ってくださった。

瓦産業と珠洲焼は同じ焼き物であっても、産業という点に関しては別個のものとして考えられている。珠洲市は代表的な地場産業の1つであった瓦産業の代わりを探していたのかもしれないが、瓦産業が大量生産で他県との競争に負けて衰退してしまったので、それと同じことを繰り返さないために、珠洲焼は少量生産という瓦産業とは全く異なる生産体制をとって振興させようとしたのである。したがって、珠洲瓦と珠洲焼は産業という点に関しては別個に考えられていたことになる。しかし、前に挙げた御二人のエピソードから考えられるに、珠洲焼の陶工、特に瓦産業に関わっていた人たちにとって、珠洲瓦と珠洲焼には何か意識的なつながりがあるのかもしれない。

4. 珠洲焼の復興

珠洲焼は、平安時代末から室町時代終わり（12世紀後半から15世紀の終わり）にかけて珠洲市および隣接する能登町の一部で作られていた中世の日本海文化を代表する焼き物の1つである。古墳時代から平安時代に焼かれた須恵器の技法を受け継いで、窖窯を用いた「還元焰燻べ焼き」で焼き上げる。釉薬を使わず高温で焼き上げるため、薪から出た灰が自然釉の役割を果たすことが多く、灰黒色の落ち着いた美しさを醸し出す。器の表には、成形の時に生じる右下がりの叩き目をはじめ、綾杉文、変化に富んだ櫛目波状文、各種の刻文や刻印などが施されている。

12世紀後半から生産され始めた珠洲焼は、海上交通によって、13世紀には越前から東北地方の日本海側まで広く流通した。その後、14世紀には最盛期を迎え、北海道南部まで運ばれるようになり、日本列島の4分の1を商圏とするまでになったが、15世紀後半には急速に衰えて間もなく廃絶した。当時は、貯蔵に使われた甕や壺、調理に使われたすり鉢などの日用品が多く焼かれていたが、他に経筒や仏・神像といった宗教儀礼で使うものも焼かれていた。

1950（昭和25）年、石川考古学研究会とともに窯跡の検証、遺物の採集を行っていた中野鍊次郎氏が、寺社瓶割坂窯を発見したのをきっかけに、珠洲焼は復興していく。1952（昭和27）年には、九学会による能登総合調査が実施され、当時は珠洲焼についての情報は皆無であり、その‘珠洲焼’という名前すら存在しなかったため、発見された珠洲陶器は須恵器の非常に退化したもの、遺存現象とみなされた。1954（昭和29）年、珠洲郷土史研究会による珠洲古窯の調査が進み、1961（昭和36）年には珠洲焼が中世の焼き物であることが明らかになった。そして1963（昭和38）年、名古屋大学で開かれた日本考古学協会大会において、石川考古学研究会の浜岡賢太郎・橋本澄夫氏が「珠洲焼」を発表し、いわゆる六古窯系の中世陶器と異質の珠洲陶器の存在が、学界の注目

を集めることとなった（珠洲市立珠洲焼資料館 1989:88-91）。

その後、1978（昭和53）には石川県立郷土資料館で“珠洲古窯”展が開かれ、珠洲焼が須恵器と大きく関係し古い歴史を持つ焼き物として話題になったのを受けて、珠洲市はこれを事業家しようと動き出す。まず、珠洲市当局や珠洲商工会議所により、1978（昭和53）年、蛸島町鉢ヶ崎の、現在は珠洲ビーチホテルが建っている場所に旧陶芸実習センター（後に陶芸センターと改称）が建設された。



写真1 市立陶芸センター

これは、故郷に独特の風合いの珠洲焼を再興し、地域の文化・産業の振興拠点とする一方、観光的にも生かすことを狙ったものである。また、珠洲焼は、地元識者や愛好者の間でその保存と研究が続けられていたが、当地方には産業が少ない、土産物もないということで珠洲焼再興の試みが具体化し、この陶芸実習センターの建設に至った。陶芸実習センターが蛸島に建設された理由は、ある陶工が作った珠洲焼の窯を珠洲市が買い取り、その窯があった場所に陶芸実習センターを建てたからである。

現在、珠洲市内には珠洲焼に関する主な施設が3つある。珠洲焼の担い手を育成する「市立陶芸センター」、現代の珠洲焼を展示・販売する「珠洲焼館」、そして中世の珠洲焼を展示する「市立珠洲焼資料館」の3つであり、これらの施設をまとめて「珠洲焼の里」と呼ばれている。

現代の珠洲焼は当時と作陶工程はほぼ変わらないものの、甕、壺、すり鉢だけでなく、花器、徳利やぐい飲み、お猪口といった酒器、湯呑、抹茶碗や茶入れ、急須などの茶器、ピアカップ、コーヒークップ、大皿、小皿、水指し、箸置き、灰皿など多様なものが作られていて、それらは珠洲焼館にて展示・販売されているだけでなく、珠洲ビーチホテルにもお土産品として販売されている。



写真2 珠洲焼館

5. 珠洲焼のこれから

珠洲焼が復興されてから30年が経ったが、まだ珠洲焼には「ブランド力」がっていないと珠洲焼資料館の学芸員の方はおっしゃっていた。珠洲焼にブランド力をつけていくためにも、現在、“珠洲焼振興プロジェクト”というものが進められ、珠洲焼に関する様々な動きがなされているようである。

その一環として、2009（平成21）年10月17、18日と2日間に渡って、珠洲市多目的ホール「ラポルトすず」にて珠洲焼フェスティバルが開催された。このイベントは、珠洲焼の復興30周年を記念したもので、窯元すべての作品を特別価格で販売する展示販売や、花器に珠洲焼を用いた華道展、茶器としての珠洲焼を体験する茶会、珠洲焼のルーツに関するシンポジウムやパネルディスカッションが行われた。入場無料で、誰でも珠洲焼に触れることのできるイベントだったようである。珠洲焼フォーラムも今までに何回か開催された。

これらのフェスティバルやフォーラムは、珠洲焼を全国に宣伝することを目的としているのではない。「まずは地元の人々、珠洲市民の珠洲焼に対する意識を盛り立てよう」というのが狙いである。したがって、シンポジウムやパネルディスカッションなどで珠洲焼に関する研究成果を披露したり、珠洲焼に詳しい学者の方々が意見交換したりするだけではなく、イベントに参加した地元の人々も一緒になって、珠洲焼をブランド化するためにこれからどうしていくのが良いかを話し合っていくのが“珠洲焼振興プロジェクト”の真の目的のようだ。

また、珠洲古窯研究会では12世紀末の珠洲古窯を当時の姿で復元し、その窯で実際に作品を焼いてみるという実験を行っている。復元した窯は、耐火レンガを使わず、土だけで窯体が作られており、モデルとなった寺家クロバタケ3号窯の寸法、形状を再現して全長9.5メートル、幅3メートル、高さ1.2メートルのかまぼこ形をしている。煙突、風機、松薪など、燃焼性能に影響するもので、当時使われなかったものは使わず、焼成品の器種、配置なども再現するという徹底ぶりである。

2009（平成21）年8月には3回目の焼成実験が行われ、19日に陶工らが制作した大瓶やつぼ、すり鉢など約60点を窯入れし、20日から26日まで焼かれた。結果は、高さ50センチ以下はほぼきれいに焼けたが、高さ80センチ前後の大瓶3個のうち2個にひび割れが入ってしまったようだ。薪の燃やし方などにまだ課題が残っているようだが、今後も実験を重ねていき、粘土から作品を形作るときの技術復元にも力を入れていくようである。

この実験で焼かれる作品は陶工らによるものだけではなく、金沢美術工芸大学の学生や市民による作品も一緒に窯入れされる。金沢美術工芸大学では工芸科陶磁専攻の学生を中心に、他の学生にも参加が呼びかけられ、20人の学生が復元窯で作品制作に挑戦した。珠洲焼資料館は「若い

感性が現代珠洲焼への刺激となってほしい」としている。また、本来の珠洲古窯で作品を焼く体験は歴史の中に身を置く貴重な体験であり、学生にとっても今後の制作活動への良い刺激となるだろう。この実験で焼き上がった作品は、「ラポルトすず」で開かれた珠洲焼フェスティバルで展示された。

市立陶芸センターで珠洲焼の指導員をされている方にもお話を伺うことができた。現在、センターには14名の研修生が在籍しているが、そのほとんどが仕事をしながらセンターに通っている方や、退職した後にセンターの研修生となった方など、年配の方が多いそうだ。陶芸センターの役割としては、珠洲焼の後継者を育てていくことが第一なので、若い人が研修生としてきてくれるのを望んでいるのだが、実際はそうはいかないようである。センターでは、研修を終えた後、その人がちゃん

と独立できるように、珠洲焼の全ての工程を教えるようだが、そのためにはセンターに足繁く通う必要がある。また、独立するには、自分の窯を持ったり材料を揃えたりと、ある程度の資金が必要となるので、若い人にはその資金を集めるのが難しいようだ。センターで研修を終えた後、独立せず、そのまま珠洲焼から離れていく人もいだろう。珠洲焼の後継者を育てるための場所はあるにしても、その後継者となる若い人が足りないというのが課題となっている。

雲津のTさん(70歳代、女性)は「珠洲焼の復興が始まって30年たったが、まだまだ知名度は低い。珠洲焼の歴史を知ってもらうだけでなく、それを観光につなげていく必要がある。そのためには、壺や甕の他にも、ビールジョッキやコーヒーカップなど手に入れやすく、普段の生活で使いやすいものを作っていかなければならない。」とおっしゃっていた。焼き物が好きで詳しい人には、

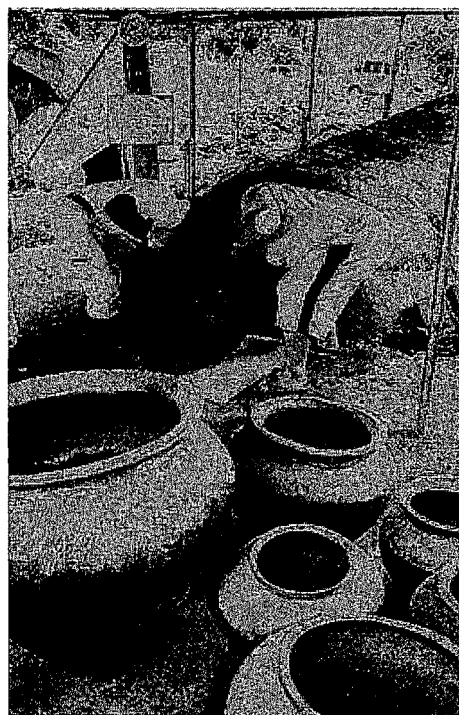


写真3 珠洲焼復元窯



写真4 珠洲焼館内

珠洲焼は‘幻の焼き物’として知られているが、そうでない人にはあまり知られていない焼き物である。私も、この調査実習で珠洲市を訪れて初めて珠洲焼の存在を知ったのである。

珠洲焼館では、多くの陶工によって作られた珠洲焼の作品が展示、販売されている。その多くが、湯のみやお猪口、ビールジョッキ、花瓶や茶碗など、普段の生活で使えそうなものばかりで、値段的にも安く、珠洲焼のことを知らなかった人にも気軽に手にとってもらえるような作品ばかりであった。色は灰黒色ばかりだが、作品を手にとって1つひとつをよく見ると、自然釉ならではの違いを発見できる。また、珠洲焼を用いたアクセサリーや携帯ストラップなども販売されていた。

6. おわりに

まず、今回の調査にご協力いただいた雲津、小泊、伏見、高波の皆様には厚くお礼を申し上げたい。初めてのフィールドワークということもあり緊張して調査に臨んだが、お話を聞かせてくださった方々の地元に対する熱い思いや、昔の産業や祭りについてわかりやすく、そして実際のエピソードを交えて面白おかしく説明してくださった皆様の優しさに触れることができ、とても充実した調査実習になった。

補充調査では、実際に珠洲焼を体験できたことも良かった。文献からは知ることのできない珠洲焼の魅力を、珠洲の土を実際に触ることで感じることもできたと思う。

石川県といえば九谷焼が有名であるが、色鮮やかで華やかな九谷焼とは違って、素朴で力強い独特の美しさを持つ珠洲焼も、石川県の代表的な焼き物としてより多くの人に知ってもらいたい。そして、ぜひ実際に手にとって、あの自然釉から生まれる美しさを感じてもらいたい。